

フランチェスカ・トリヴェッラート「グローバルヒストリーの時代にイタリア のミクロストリアに未来はあるのか」

Francesca Trivellato, “Is There a Future for Italian Microhistory in the Age of Global History?”,
California Italian Studies, 2-1, 2011.

紹介

著者によれば、ミクロヒストリーがグローバルヒストリーに与えた影響は、従来、物語りの形式という点に限られていた（特に英語圏においては）。それに対して著者は、マクロスケールな説明パラダイムの妥当性を検証するという、イタリアのミクロストリアの歴史家たちがそもそも有していた方法論的な野心に注目することで、グローバルヒストリーとミクロヒストリーを新たに交差させる方法を探求している。

・本稿で提示される二つの論点

- ①グローバルヒストリーにとって、ミクロヒストリーのアプローチが有する可能性はまだ開拓されていない。1980年代以降、イタリアのミクロストリアとグローバルヒストリーとの出会いは、主に物語りの形式(narrative form)という点に限られていた。言語的、政治的、宗教的に複数の境界線を横断して生きた個人についてのあまたの研究が、学者だけでなく広く一般の人びとの間でも大きな成功を収めている。こうした研究は、歴史家や一般読者の間で、社会科学的な分析よりも物語りが好まれていることを反映している（これはおそらく英語圏でもっとも顕著）。しかしながら、こうした研究の多くは、イタリアのミクロストリアの歴史家たちが当初抱いていた方法論的野心に及ぶものではなかった。本稿は、これらの当初の野心のいくつかを再検討することで、ミクロヒストリーとグローバルヒストリーを交差させるための別の方法を提示する。
- ②イタリアのミクロストリアの歴史家たちは、ミクロ分析とマクロ分析の関係をどのように考えるかという課題に繰り返し取り組んできた。しかし、彼らは統一的で首尾一貫した理論を提示することはなかった。ミクロ分析とマクロ分析との間の継続的な摩擦は、一つのケーススタディから引き出せる一般化の度合い、さらには学問としての歴史学の科学的地位について疑問を投げかけている。こうしたことについて概要を説明するのは本稿の範疇をはるかに超えている。しかしながら、ミクロとマクロの関係についてのイタリアのミクロストリアの歴史家たちの考察は、グローバルヒストリーの実践に健全な批判的自己反省を与える上で有益である。

1. [マクロヒストリーとしてのグローバルヒストリー]¹

- ・グローバルヒストリーを自称する研究の多くは、マクロスケールの分析を採用している。ドナルド・イエルクサは、世界史、グローバルヒストリー、世界システム論、マクロ社会学、比較文明論、地政学、「ビッグヒストリー」²といった分野を含む研究を表すのにマクロヒストリーという語を選んだ。
- ・しかしながら、「マクロヒストリーとは、簡単に言えば、人類全体がいま直面している問題がどのように生じたのかを考えると、もっともレリヴァントな歴史のスケールである」³という、イエルクサの補足的な記述には一度立ち止まってみる必要がある。イエルクサの結論には、現在の学問的議論においてはマクロヒストリーが自明な優位性を持っているという明らかな信念が表れている。グローバルなテーマは新たな正統派(orthodoxy)を作り出したのか？マクロスケールの分析はそうしたテーマに取り組む上でつねに最善の方法なのか？ミクロスケールの分析は、それにとって代わるのにふさわしいものなのか、あるいは少なくともそれを補完する助けとなるものなのか。簡単に言えば、グローバル的転回に直面したミクロヒストリーに未来はあるのか？もしあるとすれば、それはどのようなものなのだろうか。

2. [イタリアのミクロストリアの特徴]

- ・これらの問いに取り組むために、イタリアのミクロストリアの歴史家たちの目的と、彼らの研究が実際に与えた影響について簡単に考えてみたい。だれ目から見ても、イタリアのミクロストリアの歴史家たちは統一した学派を形成したわけではなかった。しかし、エドアルド・グレンディ、カルロ・ギンズブルグ、ジョヴァンニ・レヴィ、カルロ・ポーニなどを中心とした少数の研究者の集団には、学問上の相互交流があった。
- ・グレンディは、この集団のイタリアらしさを強調し、共通の「スタイル」として、強い理論的認識、哲学における観念論の拒否、政治におけるイデオロギー的な二元論の拒否、歴史叙述におけるレトリック的な壮大さや大きな統合の拒否を指摘している。イタリアのミクロストリアの歴史家たちは、その傾向がさまざまであるにもかかわらず、ローカルヒストリー、物語り的な歴史(narrative history)、フランスの私生活史(histoire de la vie privée)、ドイツの日常生活史(Alltagsgeschichte)とは一線を画していた。

¹ 小見出しのタイトルはレビュー担当者が付した。

² [人間と宇宙の歴史を 138 億年前のビッグバンの時点から描くという長大なタイムスケールの歴史。たとえば、デヴィッド・クリスチャン、シンシア・ストークス・ブラウン、クレイグ・ベンジャミン(長沼毅日本語版監修)『ビッグヒストリー われわれはどこから来て、どこへ行くのか——宇宙開闢から 138 億年の「人間」史』明石書店、2016 年]。

³ Donald A. Yerxa, “Introduction: History on a Large Scale.” In *Recent Themes in World History and the History of the West: Historians in Conversation*, edited by Donald A. Yerxa, 1-12. Columbia, SC: University of South Carolina Press, 2009, p. 5.

- ・イタリアのミクロストリアの歴史家たちが目指したのは、普通の人びとの日常生活を復元するというよりも、マクロスケールな説明パラダイムの妥当性を検証するためにミクロスケールの分析を行うことであった。彼らが批判の主なターゲットとしたのは、左派系社会史家の粗野なマルクス主義、ブローデルの「長期持続」とそこから派生したアナール学派の数量的歴史学へのアプローチ、人類学の「社会文化的機能主義」や政治学や経済学における近代化論が歴史学に与えた影響であった。
- ・社会学的なモデルではなく人類学的なモデルに触発されたイタリアのミクロストリアの歴史家たちは、普通の人びとや一貫したパターンではなく、特異な人物や現象に惹きつけられた。グレンディは「例外的な正規」(“the exceptional normal”)に注目する必要があると述べている⁴。つまり、ミクロ分析的な読みにかけることでより大きな傾向を明らかに出すことができるような、普通ではない文書史料に注目する必要があるということである。ここで強調されているのは、ギンズブルグが「徴候」(spie)と呼んだ概念のように、標準的な語られ方とは一致しない細部を含んだ一次史料との出会いである。歴史家は、一見すると例外的な文書史料から、例外的なストーリーだけでなく、典型的でレリヴァントな指標を推定する(extrapolate)ことができるのである。
- ・もっとも刺激的なミクロヒストリーの場合、ミクロスケールの分析をあらゆる研究対象(例えば、村であろうと都市であろうと)に適用し、ミクロとマクロのスケールを組み合わせている。この理想に沿って、今日ではグローバルな接続と呼ばれるものがあちこちでほめかされている。しかし、ミクロヒストリーの歴史家たちは、ローカルとグローバルの相互関係をどのように再現するかについて、完全な説明を提示していない。ミクロヒストリーの支持者の中には、物語りの装置に頼ることでこの難問を解決しようとする人もいる。この点については後で説明するが、その前に、何がミクロヒストリーとマクロヒストリーを分けているのか認識しておく必要がある。

3. [ミクロヒストリーとマクロヒストリーの違い]

- ・ミクロヒストリーの特徴
 - ①一次史料(特に裁判記録、自伝的文書、公証人文書)を多く用いる。
 - ②時間的変化の因果関係を明らかにすることよりも、複数の現象の相互関係を明らかにすることに関心があり、共時的アプローチを用いる。
 - ③イタリアのミクロストリアの主人公は、ヨーロッパの白人男性で農村部の貧困層や中産階級の人物が多い。
 - ④抽象化を拒絶するわけではないが、物事を複雑に捉えようとする⁵。

⁴ 歴史学文献レビュー⑦を参照。

⁵ 歴史学文献レビュー④を参照。

・マクロヒストリーの特徴

- ①二次史料（理想的には多言語で書かれたもの）を多く用いる。
 - ②記述が、数千年とは言わないまでも何世紀にもわたって展開され、かなりのスピードで進んでいく。
 - ③ヨーロッパを比較の視座から捉えようとする。
 - ④一般化のために単純化する傾向がある。
- このようなリストに基づいて、マイクロヒストリーとマクロヒストリーの間に収束点を見出すことは困難である。以下ではまず、①イタリアのミクロストリアがグローバルなテーマにあまり関心を示さなかった理由について説明する。②次に、マイクロヒストリーとグローバルヒストリーがこれまでに交差してきた議論を紹介する。③最後に、実りある探求が可能な両者の交わる点を提示する。

4. [マイクロヒストリーとグローバルヒストリーの関心の違い]

- ・グローバルヒストリーの歴史家が、相対主義やヨーロッパ中心主義の問題に直面しているのに対して、イタリアのミクロストリアの歴史家たちは、こうした問題にほとんど無関心だった。彼らにとって「相対主義」という言葉は、別の関心を呼び起こすものだった。彼らは、言語論的転回後に経験主義や客観性の追求に対する自信を喪失すると考えられた人文学の動向に対して、ナイーブで保守的な実証主義に陥ることなく対応したいと考えていた。
- ・また、彼らは、ヨーロッパ中心主義ではなく、「自民族中心主義」(ethnocentrism)と呼ばれる過去の遺物と闘っていた。自民族中心主義に対する彼らの批判は、歴史学と人類学の出会いから生まれたもので、人間の行動に関する暗黙の普遍主義的な前提を捨て去ることが求められていた。1979年、ギンズブルグとポーニは、「自民族中心主義的な幻想の終焉（これは逆説的に、グローバル市場の統一と同時に起こった）により、普遍的な歴史という考えは通用しなくなった」と主張した⁶。
- ・ギンズブルグが、18世紀初頭にインド洋を横断する貿易に人生の大部分を費やしたスイスのあるカルヴァン主義者の植民地計画を精読することで示そうと試みたのは、マルクスとウェーバーの資本主義理論に照らして、[この人物の]物語には「ミクロストリアと理論を分断すると考えられてきた障壁のいくつかをとりこわすチャンスがある」ということだった⁷。この論文における彼の結論は、体系的というよりも呼びかけのな

⁶ Carlo Ginzburg and Carlo Poni, "The name and the game: Unequal exchange and the historiographic marketplace", in Edward Muir and Guido Ruggiero (eds.), *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, The Johns Hopkins University Press, 1991, p. 4. 歴史学文献レビュー③を参照。

⁷ Carlo Ginzburg, "Latitude, Slaves, and Bible: An Experiment in Microhistory", *Critical Inquiry*, 31-3, 2005, p. 682 [上村忠男訳「緯度・奴隷・聖書 — ミクロストリアの一実験」『ミクロストリアと世界史 — 歴史家の仕事について』みすず書房、2016年、26頁]

ものであるが、ギンズブルグの目標はグローバルなスケールで生じた変容を説明する既成のパラダイムの価値観に取り組むことである。

5. [イタリア外のマイクロヒストリーにおける物語り的なアプローチ]

- ・イタリアの外で書かれたマイクロヒストリーの多くは、こうした大胆な方法論的主張をはっきりと表明してはいない。彼らの際立った特徴は他のところにある。それは物語りのスタイルで書かれていることである。イタリアのマイクロストリアの歴史家たちは、過去をどのように語るかという選択が歴史学の分野とその読者に影響を与えることを認識していたが、物語ること自体には傾倒しなかった。彼らは、過去を未知の領域に変え、既知の現象を顕微鏡にかけることで新たな意味を獲得することを目指していた。
- ・それに対して物語り的な歴史(narrative history)は、大まかに言えば過去をより身近に感じさせ、失われた世界の一部を読者に感じさせることを大切にしている。アンソニー・モルホによればマイクロヒストリーという言葉は、北米では「エレガントな物語り」、ヨーロッパの大陸部では「理論的な豊かさと分析の複雑さ」という異なる意味を有した⁸。
- ・大西洋を隔てるこうした乖離には、構造的な理由と偶発的な理由とがある。根底にあるのは、過去の人間の闘争や勝利を直線的に記憶し、知識を累積させることを歴史家の使命とするホイッグの伝統である。さらに、物語りのスタイルは、長い間、英語圏の歴史学においては誇りとされてきた。また、イタリアのマイクロストリアが大西洋を横断したのは、1980年代半ばから90年代初めにかけての「新しい文化史」の最盛期だった。このことが(特に、イタリア語を読まない歴史家の間で)、マイクロストリアの選択的な領有(appropriation)を促した。英語圏では、まず、マイクロヒストリーは、誰もが好奇心をそそられ、読者の共感を呼ぶような周縁的な人物に光を当てるための道具となり、時には窮屈すぎると思われる証拠の基準から歴史家を解放し、アカデミックな文章をより多くの読者が読めるようにするための道具となった。

6. [マイクロヒストリー的な物語りへのグローバルなテーマの挿入]

- ・特にアメリカでは、学者の社会的地位がヨーロッパの大半の国よりも低く、研究の超専門化と狭量化の廉で攻撃を受けている。何千年にもわたる世界中の人間の生を理解しやすい物語りの形式で書くことは、もはやホイッグ的な物語の影響ではなく、専門家が象牙の塔に引きこもり、よくわからない専門用語を使って「人類」には何の関係もない些細なことの調査に熱中しているという批判への応答となっている。この戦略が非常に効果的であることは、ジャレド・ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』(1997年)が1998年のピューリッツァー賞一般ノンフィクション部門を受賞したことからもうかがえる。
- ・トニオ・アンドラーデは、二つの絡み合った現象を指摘している。それは、「マイクロヒ

⁸ Anthony Molho, "Review of Brucker 1986", *Renaissance Quarterly*, 40-1, 1987, p. 99.

ストーリーの物語り的な歴史への転換」と「マイクロストーリー的な物語りへのグローバルなテーマの挿入（主に自伝的なレンズを通して読まれる）」である。前者についてはすでに述べたので、ここでは後者について述べたい。

- ・伝記的な視点は、マイクロストーリーの本来の趣旨と経験的な貢献の一部であり、近年のグローバル的転回ではこの視点が具体的に活用されている。グローバルストーリーが課題としているのは、一人の個人の人生を再構築することによって、文化や集団を横断する複数の重なり合った接続を、それらに関与した個々の行為者の視座から理解することである。
- ・このような問題設定は、イタリアの歴史家たちを動かしてきたものとは大きく異なっている。近代化論、機能主義、エリートと民衆文化の図式化されたモデルに対する批判は過ぎ去った。残っているのは、自民族中心主義についての新しい、より文字通りの（しかしそれに劣らず重要な）問題であり、共通の敵は今や「文明の衝突」論である。もっとも繰り返し取り上げられるテーマは、文明の衝突論が想定しているような言語的・文化的障壁を回避したコミュニケーションや交渉の経路についてである。

7. [著者が自著で試みた分析]

- ・イタリアのマイクロストーリーの歴史家たちは、主に二つの方法でマイクロ分析にマクロな全体像を導入しようとしてきた。一つ目は、体系的なデータ収集をおこない、個人の行動や信念を、彼または彼女の親戚、隣人、知人、上司との関係に照らし合わせる方法である（レヴィのジョヴァンニ・バッティスタ・キエーザについての研究がそうだった）。二つ目は、一つのテキストから徐々に距離を置き、通常は異なる文化的伝統に属するテキストの宇宙を横断して、テキストの影響(echoes)や派生(filiations)を明らかにする方法である（ギンズブルグがもっとも頻繁に採用している方法）。いずれの方法も、グローバルスケールでマイクロストーリーを書くときに有効活用できる。

[以下の 7 節の内容については省略、内容としては著者が Francesca Trivellato, *The Familiarity of Strangers: The Sephardic Diaspora, Livorno, and Cross-Cultural Trade in the Early Modern Period*, Yale University Press, 2009. 和栗珠里・藤内哲也・飯田巳貴訳『異文化間交易とディアスポラ——近世リヴォルノとセファルディム商人』知泉書館、2019 年、でおこなった分析の紹介となっている]

8. [マイクロストーリーの共時的なアプローチと比較史の視座]

- ・パラシュート兵のように広い展望で調査する歴史家とは対照的に、マイクロストーリーの歴史家たちはトリュフ・ハンターに例えられてきた。マイクロストーリーが時間的変化の研究に不向きであることは認めざるを得ない。マイクロストーリーは、既存の大きな物語の土台を崩すような重要な細部を発掘するが、それを新しい物語に置き換えるのには

苦労する。マイクロヒストリーの歴史家たちは、人類学者のように共時的なアプローチを採用する傾向がある。このような共時的なアプローチは、多くのマクロヒストリー的な説明が、一つの出来事、一つの世紀、一つの文明から次のものへと速いペースで進んでいくのに対して、貴重なカウンターウェイトを提供することができる。

- ・また、細部を発掘するだけでなく、それをもとにした分析を加えることもできる（特に比較をどのように行うかという点で）。ギンズブルグは、マルセル・モースの言葉を引用して、マイクロヒストリーが説得力のある比較をもたらすことができるという確信を表明している。「一つの事例を深く分析すれば、広範な比較のための基礎を十分に提供することができる」⁹。
- ・歴史家は、比較社会学者が分析単位を構築したり回帰分析を行ったりする際、それらの単純化に不満を抱くことが多いが、比較史の分野に足を踏み入れる人は少ない。ケネス・ポメラントによる 18 世紀のヨーロッパ(イギリス)とアジア(中国)の経済発展の比較は、比較の単位のあいまいさや、ポメラントが処理したデータの不均一さのために批判することもできるが、比較の中でマイクロとマクロの次元を統合しようとした見事な試みのためにその影響力は長く続いている。

9. [まとめ]

- ・イタリアのミクrostリアは「ビッグヒストリー」を目指していたが、それは 130 億年におよぶ地球上の人類の歴史を包含するためではなく、歴史について何か大きなことを言おうとするためだった。それが少なくとも目指していたのは、社会や文化のシステムがどのように生まれ発展していくのか、人文科学者や社会学者はそうしたシステムを解釈するためにいかなる方法を採用するのか、といったことについて大きな問いを提起することだった。
- ・マイクロヒストリーがどの程度の成功を収めたかについては議論の余地があるが、イタリアの創始者たちが目指していたのは、良い物語(good story)を大きく越えるものだった。それは、特定の学者集団から生まれたものであると同時に、その時代と場所から生まれたものでもあった。今日の歴史学の風景は当然それとは非常に異なっている。しかし、イタリアのミクrostリアの歴史家たちが提起した問題のいくつかは、グローバルヒストリーの実践者にとっても建設的な貢献となり得る。
- ・ときに、量的社会科学における歴史学的転回(historical turn)の影響力の増加は、学問分野間の対話を広げるよりも狭めてしまっているように見える。歴史家を過去についての単なる語り部の役割に押しやり、過去（特に過去の大きなスケールの現象）の解釈の方は社会学者に委ねているのである。歴史家は、反抗的ではあっても、しばしば

⁹ Carlo Ginzburg, "Latitude, Slaves, and Bible: An Experiment in Microhistory", *Critical Inquiry*, 31-3, p. 682, n. 56.

進んでこの役割を担っている。

- 1979年、ローレンス・ストーンはよく知られているように歴史家の間で「物語りの復活」が起きていることを見出し、その原因を「経済的あるいは人口動態的な単因決定論や数量化への幻滅」(フランスのアナル学派や北米のクリオメトリクス¹⁰に代表される)の広がりへ帰した。この幻滅が、「(多くの歴史家の間で)自分たちの研究成果を、知的ではあるが専門家ではない読者に今一度アクセスできるようにしたいという願望」を生むことになった。
- 1970年代、イタリアのマイクロヒストリーの歴史家たちも経済的・人口動態的決定論に幻滅していたが、彼らはストーンが述べたのとは著しく異なる方法で応答した。こうした議論が行われてから四半世紀以上が経過した今日でも、まだその反響を聞くことができる。グローバルヒストリーの歴史家たちの数は増え、洗練されてきてはいるが、西洋の台頭についての唯物論的、文化主義的な説明が消滅したわけではない。実際、マクロ分析はしばしば一般化を導くが、そのような一般化というのはグローバルヒストリーが無効にしようとしているヨーロッパ中心主義にかつて結びついていたものなのである。
- このような学問的なパノラマの中で、マイクロヒストリーは万能薬も統一理論も与えることはできないが、つぎのような装置を提供することはできる。つまり、①抽象と細部のバランスをとること。②明らかな矛盾の前で立ち止まり、構造的な断絶を安易に強調することで不当に排除されてしまうような対応関係(parallelism)を見出すこと。③文化的形態が政治的・経済的構造と結びついて発展する仕方について、「文明」の枠を超えて創造的に考えること。
- そして何よりも、今後のグローバルヒストリーの課題は、マイクロとマクロの分析単位をどのように並べるのか、また、空間や時間を超えた比較をどのように行うかを慎重に考察することである。イタリアのマイクロヒストリーの歴史家たちは挑戦的な態度をもって、こうした方法論上の問題をハードな社会科学に譲ることを拒否した。私たちが彼らの著作に立ち返るのは、社会科学的分析と物語りとを融合させる当初の試みを、今度はグローバルな舞台において、更新するためである。

¹⁰ 1960年代以降に登場してきた、統計数量に依拠した数量経済史。